

論文の和文要旨	
論文題目	日本語の移動動詞の研究
氏 名	李善姫 (イ・ソニ)

本稿は、実際の言語資料に現れる日本語の移動動詞と場所名詞句との結びつき方からその語彙的意味、特に範疇的意味の側面を明らかにし、その範疇的意味が動詞と名詞との結合という構文的な現象以外のいくつかの文法現象とも関係があることを示すものである。

本稿では、実証的な研究を行うためコーパスを用いるが、本稿のコーパスに設定したのは、1945年以降に刊行された日本人作家による小説、エッセイ、紀行文などの計51冊分(約19.1MB)の言語資料である。考察に用いるデータは、このコーパスから採集した異なり語数45語の移動動詞の用例、21,849例である。

第1章 移動動詞の格結合分布

第1章では、カラ格、ヲ格、ニ格などの場所を表す名詞句と結びつくことができる移動動詞が、実際の言語資料においては、それぞれの格の名詞と異なる結合頻度で現れることを示した。

コーパスにおける移動動詞と場所名詞句(ヲ格、ニ格、ヘ格、カラ格、マデ格)との結びつきを調査し、その結合分布から、“移動”という共通の意味をもちつつも、それぞれの移動動詞が特定の名詞句との結びつきにおいて、異なる結合頻度を表すことを示した。そして、同じ結合能力をもつ動詞であっても、実際の使用においてはそれぞれの動詞が異なる格結合頻度で現れることを明らかにした。

第2章 空間的移動表現—場所名詞句との結合頻度からみる範疇的意味—

第1章で調べた格結合は形態論的な格であるが、第2章では、それぞれの格が移動動詞と結びつく場合、移動動詞に対してどのような意味的關係で結びつくかという、意味的な観点による考察を行った。つまり、移動動詞と場所名詞句(出発点、経過点(経由点と経

路に分ける)、到着点、方向、目的地を表す場所名詞句)との結合頻度を調べ、その結合頻度から移動構造と各々の移動動詞の語彙的意味、特に範疇的意味の側面を明らかにした。そして、移動動詞と場所名詞句との結合頻度からそれぞれの動詞の範疇的意味を考察した。さらに、その範疇的意味から日本語の移動動詞を分類したが、それは次の表の通りである。まず、日本語の移動動詞は5類(<出発志向動詞><経過志向動詞><到着志向動詞><目的地志向動詞><方向志向動詞>)に分けられるが、各類に属する動詞は、同じ範疇的意味をもつ動詞類である。5類に分けた動詞の中で<経過志向動詞>は、さらに<経路志向動詞>と<経路志向動詞>に分けられる。

しかし、同じ類に属する動詞であっても、つまり、同じ範疇的意味をもつ動詞であっても、最も多く結びつく場所名詞句以外の場所名詞句との結びつきにおいては異なる結合頻度を示すのである。それを考慮することによって、5類はさらに21種に下位分類できる。

表 1 移動動詞の分類と各類の動詞の範疇的意味

		動詞類	範疇的意味	その類独自の意味	動詞	
出発志向動詞		純粹出発動詞	出発の 位置変化		はなれる	
		出発目的地動詞		目的地への移動	たつ、さる	
		出発到着経路動詞		到着の位置変化、経路動作	おりる	
経過志向動詞	経路	純粹経路動詞	経過動作		すぎる、よぎる、こえる、くぐる	
		経路到着動詞		到着の位置変化	ぬける、わたる	
		経路経路動詞		経路動作	とおる	
	経路志向動詞	純粹経路動詞		経路動作		めぐる、つたう、まわる、たどる
		無方向経路動詞			無方向性	ぶらつく、うろつく、さまよう
		経路到着動詞			到着の位置変化	くだる
		様態経路方向動詞			移動様態、ある方向への移動	はう、あるく、かける、およぐ、すべる
	様態経路目的地動詞	移動様態、目的地への移動	はしる			
到着志向動詞		純粹到着動詞①	到着の 位置変化		いたる、うつる、つく、おもむく、しりぞく	
		純粹到着動詞②		移動体が複数	むらがる、あつまる、むれる	
		純粹到着動詞③		(経路と結びつく)	もどる、いく、かえる、くる	
		純粹到着動詞④		(経路点と結びつく)	はいる	
		到着出発動詞		出発の位置変化(経路点と結びつく)	でる	
		到着経路動詞		経路動作	あがる、のぼる	
目的地動詞		純粹目的地動詞	目的地への移動		むかう	
方向志向動詞		方向到着動詞	ある方向への移動	到着の位置変化	さがる	
		方向経路到着動詞		経路動作、到着の位置変化	すすむ	
		様態方向経路目的地動詞		移動様態、経路動作、目的地への移動	とぶ	

このように、同じ範疇的意味をもつ動詞であっても、一方ではそれぞれ異なる語彙的意味の側面をもつ場合もあり、動詞の語彙的意味は単面的なものばかりではなく、多面的なものもあることを明らかにした。

以上は移動体が有情物である場合の移動動詞の性質であるが、同じ移動動詞でも無情物移動体の場合は、結びつく格に制限があり、移動体の性質によって異なる構造をとることが分かった。このような格との結合制限から移動動詞の語彙的意味を考える際には、移動体の違いも考慮すべきであることが明らかになった。

第3章 虚構的移動表現

第3章では、第2章で考察した空間的移動表現の拡張表現である、「学校の前を広い道が走っている」のように、実際には空間的な移動は行われず、いわば虚構的移動表現について考察した。

虚構的移動表現には、〈場所主体移動表現〉（「細い道が学校の前を走る」）と〈一般者主体移動表現〉があり、〈一般者主体移動表現〉にはさらに、〈経過点描写表現〉（「2階の教室に行く階段」）、〈到達経過表現〉（「坂を下りたところにお店がある」）がある。そしてそれぞれの表現には動詞の制限が見られる。まず、〈場所主体虚構移動表現〉には、ほとんどの移動動詞が現れるが、その中でも経路志向動詞、経路志向動詞（無方向経路動詞は除外）が最も多く現れ、〈場所主体虚構移動表現〉は移動体として描写される「場所」がどこを通るのかを主に表現するといえる。また、経路志向動詞の中で、移動様態を表す様態経路目的地動詞の「はしる」がこの表現に多く現れ、移動様態を表す他の動詞とは異なる側面を見せる。「はしる」は移動様態を表す他の動詞とは異なって、目的地の「ニ格／へ格」名詞と結びつくことができる動詞（「とぶ」は除外）であり、その特異な性質を場所主体虚構移動表現においても確認することができた。

また、〈一般者主体虚構移動表現〉のうち〈経過点描写表現〉の場合、経路到着動詞、経路到着動詞、到着経路動詞、出発到着経路動詞、純粹到着動詞③④、目的地志向動詞しか現れない。これらの動詞はすべて到着の位置変化や目的地への移動を表す動詞であり、かつ経過点か経路と結びつくことができる動詞である（目的地志向動詞は単独で経路と結びつくことはないが、目的地と共起する場合、経路と結びつくことができる）。このような動詞の制限から、経路動作や経路動作のみを表す動詞（純粹経路動詞、純粹経路動詞）と、経路動作や経路動作と到着の位置変化の二側面をもつ動詞（経路到着動詞、経路到着動詞、到着経路動詞、出発到着経路動詞）が異なることを示した。さらに到着の位置変化を表す動詞であっても、経過点や経路と結びつくことができる到着出発動詞と純粹到着動詞③④が到着の位置変化のみを表す他の動詞とは異なることを明らかにした。

さらに、＜一般者主体虚構移動表現＞の＜到達経過表現＞においても、経由動作を表す動詞は動作の完了を表し、経路動作を表す動詞は動作の過程をも表すことができることから、経由動作を表す動詞と経路動作を表す動詞の違いを示すことができた。また、経路動作を表す動詞のうち経路動作と到着の位置変化を表す二側面動詞は経路動作のみを表す動詞（純粹経路動詞）とは異なって、経由動作を表す動詞と同じ様子を示すことから、両者には異なる語彙的意味の側面があることをみた。さらに、移動様態を表す動詞は純粹経路動詞と異なる側面を見せること、無方向経路動詞は＜到達経過表現＞に現れないことから、経路動作を表すという共通の範疇的意味をもつ動詞であっても、純粹に経路動作のみを表す動詞、二側面をもつ動詞、移動様態を表す動詞、無方向経路動詞がそれぞれ異なる側面を示すことを明らかにした。

第4章 複文における出来事間の意味的關係

第4章では、移動動詞を従属節の述語とする複文における前件と後件の間の意味的關係にも移動動詞の範疇的意味が反映されることを示し、第2章で提示した移動動詞の分類の有効性を明らかにした。

まず、移動動詞の「テ」形で表される前件は後件に対して、「1) 場所提示、2) 方向、3) 空間的経過、4) 状況、5) 同時進行、6) 状態、7) 移動様態」の7つの意味的關係で結びつく。これらそれぞれの意味は構造に支えられているが、それぞれの構造には動詞の範疇的意味が反映されるのである。例えばそれぞれの意味的關係は移動動詞の範疇的意味に次のように相応する。

＜場所提示＞：到着の位置変化を表す動詞のテ形

＜方向＞：目的地志向動詞のテ形

＜空間的経過＞：経由動作や経路動作を表す動詞のテ形

＜状況＞＜同時進行＞：経路動作のみを表す動詞のテ形

＜移動様態＞：移動様態を表す動詞のテ形

＜状態＞：出発の位置変化のみを表す動詞のテ形／移動体が複数である到着の位置変化を表す動詞のテ形

このように移動動詞の「テ」形で表される複文における前件と後件との意味的關係とも移動動詞の範疇的意味が関係することを示した。

次に、「～スルト／スレバ／シタラ」の形の条件節について考察し、これらの節が後件との関係において動作や位置変化の完了を表したり（「橋を渡ると、三重塔がある」「繁華街に出ると、人がたくさん出ていた」）、動作の過程を表したり（山道を歩くと、あちらこちらに碑石があった）することには、動詞の範疇的意味が深く関係していることをみた。

「～スルト」で動作の完了を表すのは経路動作を表す動詞、動作の過程を表すのは経路動作を表す動詞である。しかし、経路動作を表す動詞でも、到着の位置変化をも表す二側面をもつ動詞の場合は、動作の過程よりは完了を表す（「階段を上ると、小さな部屋があった」）意味が強く、経路動作のみを表す動詞とは異なる側面をみせている。

このように同じ動作を表す動詞であっても、経路動作を表す動詞と経路動作を表す動詞が異なること、同じ経路動作を表す動詞であっても、経路動作のみを表す動詞と経路動作と到着の位置変化を表す二側面をもつ動詞が異なる側面を表すのは、それぞれが異なる範疇的意味をもつからであることを確認することができた。「～スルト」にみられるこのような特徴は、「～スレバ/シタラ」においても同様である。「～スルト/スレバ/シタラ」を考察することによって、第2章において経過点を表すヲ格名詞を経由点と経路に二分したことの妥当性があらためて確認できたといえる。

第5章 複合動詞

第5章では、前項が移動動詞である複合動詞の語構成と意味について考察し、複合動詞においても、第2章で明らかにした移動動詞の範疇的意味が関係することを示した。考察対象とする複合動詞は、1. 「移動動詞の連用形＋移動動詞」、2. 「移動動詞の連用形＋ハジメル/ツヅケル」、3. 「移動動詞のテ形＋イク/クル」という三つの語構成タイプである。

まず、「移動動詞の連用形＋移動動詞」の語構成をなす複合動詞（「あるきまわる」）は、経路動作や経路動作を表す動詞が前項、出発や到着の位置変化を表す動詞が後項に現れやすい。経路動作を表す動詞（純粋経路動詞、無方向経路動詞、経路到着動詞、到着経路動詞、出発到着経路動詞、移動様態経路動詞（様態経路方向動詞、様態経路目的地動詞、様態方向経路目的地動詞））の中でも移動様態経路動詞は、無方向経路動詞以外のすべての移動動詞の前項動詞として最も多く現われる。無方向経路動詞は「あるく」以外の移動動詞の前項動詞になりやすく、経路動作を表す動詞であっても前項動詞になりにくい。また、移動様態経路動詞、無方向経路動詞以外の経路動作を表す動詞が前項動詞になる場合もあるが、その数は少なく、移動様態経路動詞とは対照的である。この類の複合動詞の場合も、移動様態を表す動詞の特異な性質や位置変化を表す動詞と動作を表す動詞との異なる性質を確認することができた。

次に、「移動動詞の連用形＋ハジメル/ツヅケル」の語構成をなす複合動詞（「歩きはじめる」「歩きつづける」）の場合、前項動詞に動作動詞である経路動詞や経路動詞が現れる場合、「～ハジメル」の複合動詞は基本的に動きの開始（「坂をくだりはじめる」）、到着の位置変化を表す到着動詞が現れる場合は、位置変化が反復的に生じることを表す（「お店に

行きはじめる)。「～ツヅケル」の複合動詞は前項に経路動詞が現れる場合は、動きの継続(「山道を歩きつづける」)を表し、経路動詞や到着動詞が現れる場合は動きの反復を表す(「お店に行きつづける」)。しかし、到着の位置変化を表す動詞であっても、経路動作と到着の位置変化を表す二側面動詞の場合は、到着点と結びついても動きの開始、継続を表しやすく(「山頂に登りつづける」)、純粹に位置変化のみを表す動詞とは異なる側面を見せている。

このように「～ハジメル/ツヅケル」の前項動詞に現れる動詞の範疇的意味によって、複合動詞全体の表す意味が異なることから、「～ハジメル/ツヅケル」の複合動詞の表す意味にも動詞の範疇的意味が関係することを明らかにした。

最後に「移動動詞のテ形+イク/クル」の語構成をなす複合動詞(「離れていく/離れてくる」)についても考察した。移動様態を表す動詞が前項動詞に現れる場合、他の移動動詞とは異なり、補助動詞的にはたらいで、後項動詞の「イク/クル」の移動様態を表すことができる。このことから移動様態を表す動詞の他の移動動詞とは異なる側面を明らかにした(「歩いていく/歩いてくる」)。

また、出現頻度としては、全体的に、動作を表す動詞は「～イク」の前項動詞として、位置変化を表す動詞は「～クル」の前項動詞として現れやすい傾向がある。さらに、詳しく見ると、「～クル」の前項には到着の位置変化を表す動詞が多く現れ、「～イク」の前項には出発の位置変化を表す動詞、経路動作を表す動詞が多く現れることから、それぞれの動詞の範疇的意味との関係を見ることができた。また、同じく経路動作を表す動詞であっても、無方向経路動詞は「イク/クル」の前項動詞として現れず、経路動作を表す他の動詞とは異なることを再度示した。

第6章 辞書の意味記述と例文提示の問題

第6章では、現行の国語辞書から、『広辞苑』(第六版)、『新明解国語辞典』(第六版)、『岩波国語辞典』(第六版)、『日本語基本動詞用法辞典』(第六版)の四冊の辞書を選び、これらの意味記述と本稿の考察結果とを対照しながら、その意味記述や提示された用例の不十分なところを指摘し、第1～第5章全体の考察に基づく新たな意味記述を提案した。本稿で提案した意味記述や用例提示の方法は、結合頻度から得られた範疇的意味に基づくものである。また、それぞれの移動動詞の文型を示すと同時に、共起する名詞句がどのような意味の名詞句であるかを示すことにより、移動動詞の語彙的意味のより正確な把握をねらいとするものである。

終章では、本稿で考察した全体を要約し、総括した。

以上、本稿では、実際の言語資料に現れる移動動詞と場所名詞句との結合頻度から動詞の語彙的意味、特に範疇的な意味を明らかにし、同じ範疇的な意味をもつ動詞であっても、それぞれ異なる側面をもつ動詞もあることから移動動詞の語彙的意味の多面性を示すことができた。さらに、他の観点からも考察を行うことによって、移動動詞の範疇的な意味が種々の文法現象とも関係があることを明らかにした。また、本稿のような頻度調査による研究は、日本語の辞書や日本語教育などの実用的なところでも必要であることを示した。